

Co-Creation & Co-Working

人権に根ざす共創・協働の「安心の居場所」⑫

パンデミックの恐怖と戦争の苦境の中で

大東文化大学名誉教授 川村 千鶴子

感染者数5億人と推定されるパンデミックと戦争の悲壮感の中で、
人々はどのように苦境と悲しみを乗り越えたのだろうか。
共創・協働の歴史を学んでみたい。



写真1:習志野捕虜オーケストラ 指揮は、ハンス・ミリエス
出典:習志野市教育委員会

1. 写真に問う

「いつ? どこで? だれが? 何をしているの?」

これは1918(大正7)年ごろ、千葉県の習志野
俘虜(ふりょ)収容所内でのオーケストラ演奏中の
写真である。

第一次世界大戦は、1914(大正3)年に勃発した。日英同盟をよりどころに日本は連合国側に立って参戦し、ドイツの根拠地・青島(チンタオ)を攻撃した。マイヤー＝ワルデック総督以下5,000名近いドイツ将兵が、日本の捕虜^{*1}となり、日本各地の俘虜収容所に収容された。習志野俘虜収容の約1,000名の将兵は、日本側が用意したバラツ

クの他に、広大な構内にラウベ(あずまや)と呼ぶ小屋を作り、演奏会や演劇を行う野外ステージを作り、菜園を作り、ビールまで醸造して日々を送っていた。捕虜はそれぞれの特技を披露し研鑽を積むことができた。捕虜オーケストラは定期的に演奏会を開き、ベートーヴェン、モーツアルト、シューベルトやヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」を演奏していた。

サッカー、テニス、ホッケーなどを楽しみ、体育祭

*1:捕虜と俘虜とは、殆ど同義に使用された。田村謙によれば、捕虜とは、一般的に、戦争や内乱で敵に捕らえられ、その権力(支配)下に置かれた軍人や民兵などの組織的武装集団の構成員(傭兵・スパイを除く)をいう。戦前の日本では公式的には俘虜と呼ばれた。

を開き、ドイツ体操とも呼ばれる「トゥルネン」で体力づくりに没頭している。地域住民は捕虜から異文化を学び、日常的交流から信頼を深め、相互に多文化意識が萌芽していた。オーケストラの写真は、一世紀を隔ててコロナ禍にある私たちに協奏と共に創の尊さと平和への強い願望を伝えている。

2. 多文化の織り成す日本語教室

捕虜には、日本に親善訪問に来る途中でたまたま開戦に巻き込まれ、青島でドイツ軍に合流せざるを得なかったオーストリア・ハンガリーの巡洋艦の乗組員も含まれていた。現在のオーストリア、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ユーゴ、北イタリアなどの実に多様な出身者が、「独軍俘虜」として日本各地を移動し、収容所に送られた。ドイツの占領下にあった南洋群島ミクロネシア地域のポンペイ島(旧ボナペ島)に暮らしていた3名のボナペ人も、ドイツ兵士として習志野俘虜収容所で暮らしていたのだった。

俘虜劇団は劇作家イプセンに挑戦し「捕虜力レッジ」を開催した。映画の野外上映もあった。日



写真2:日本語の勉強会 出典:習志野市教育委員会

本文学に深い造詣のある兵士は、日本の民話や俳句の翻訳に没頭し、俘虜収容所内で日本語教室が開かれている。多国籍・多文化・多言語な捕虜集団である。彼らは、収容所内に、日本語・英語・仏語・数学・電気工学・機械工学・物理学・歴史・政治など多様な学びのプラットホームを共創した。

写真は、学びの尊さと愉しさを伝え、一人ひとりの内発性を伝えてくれる。人は、いかなる境遇にあっても学びの共創から尊厳を失わず、叡智を生み出す力をもっている。日本文化の勉強会も捕虜が講師となって開催され、次々に相乗効果があった。体操・料理・工芸品・日本語教室といった共創・協働の実践は、国籍や立場・身分・言葉の壁を超えて共創価値を創出したに違いない。

3. 共に働き想う時空の創造

—共創・協働の「安心の居場所」—

捕虜たちは、鉄条網の中に閉ざされることなく地域で協働することができた。周辺の主婦たちが洗濯物の請負に収容所に通い、肉の仕入れに出ていたドイツ兵は、親切な肉屋にハムやマヨネーズの

製法を自発的に教えた。収容所の出入りが自由であり、ドイツ兵のソーセージ職人は、ソーセージ作りの秘伝を公開し、本格的な製法がこの時に伝わり、農商務省の講習会を通じて全国に広まった。

協働と共に創が自立心と異文化間の潤滑油となっている。コンデンスマミルクの技術指導者、洋菓子作りの指導者なども知られて

いる。ドイツ兵が残した山梨県のぶどう園は、その後、サントリー山梨ワイナリーとなった。日本に残ったドイツ兵のソーセージ職人はソーセージ工場を作り、ヨーゼフ・ヴァン=ホーテンはソーセージの技術指導を行った。ワイン工場、ソーセージとハム工場といった新しい産業を興したのだ。

当時のハーグ陸戦法規および捕虜の待遇に関する国際法を遵守し、各地の捕虜収容所で、協働の時空を共創した蓄積は、新しい商品に「多文化共創」という付加価値を付けた。1世紀を隔てて、写真集『ドイツ兵たちの習志野』(習志野市教育委員会)は、住民と捕虜の「安心の居場所」であったことを伝えてくれる。オーケストラ団体の創設に「パン」「体操」「ドイツ語」「ソーセージ」「ワイン」「演奏会」「演劇」「ボトルシップ」に見る内発性と情熱は、戦争の放棄と平和の尊さを後世に伝えてくれる。

4. 1918年、猛威をふるった「スペイン風邪」

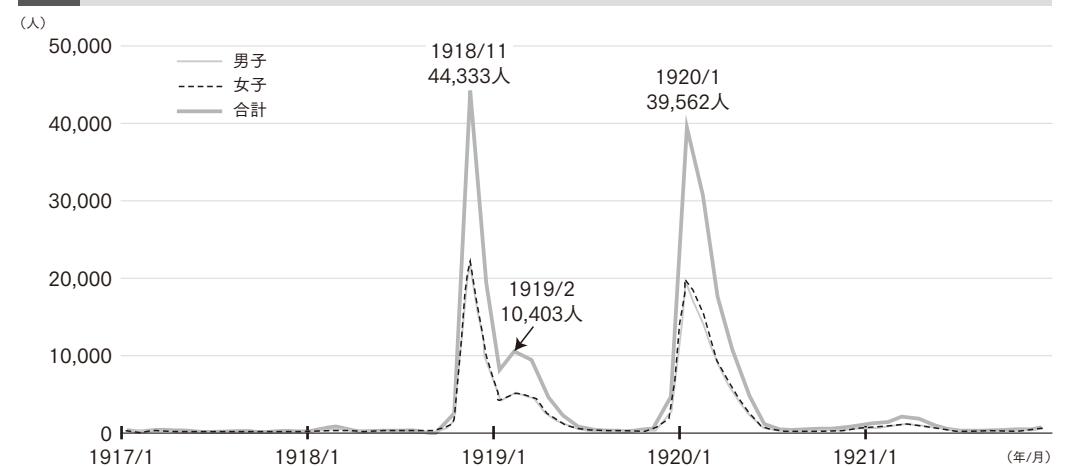
冒頭の写真が撮影された頃、世界は「スペイン風邪」と呼ばれたインフルエンザの猛威に覆われていた。1918(大正7)年、見えない敵「スペイン風邪」によって、初代・西郷寅太郎所長と25名のドイツ兵が死亡した。

図1は、「スペイン風邪」による月別の死者数で、17(大正6)年~21(大正10)年まで載っており、死者数のピークの片方は、18(大正7)年11月である。

19(大正8)年、スペイン風邪の死者のために葬儀と埋葬が行われた。2枚の写真は、犠牲者を囲む捕虜たちの深い悲しみを伝えている。

解明のできない「スペイン風邪」への恐怖と不安、そして25名の無念を人々は共有した。第一次世界大戦はドイツの敗北をもって終結し、19(大正8)年は帰国の大年となった。ベルサイユ講和条

図1 インフルエンザによる死者数の月別推移



出典:「日本におけるスペインかぜの精密分析(インフルエンザ スペイン風邪 スパニッシュ・インフルエンザ 流行性感冒 分析 日本)」東京都健康安全研究センター年報、56巻、p.369-374 (2005)、東京都健康安全研究センター



写真4:葬儀 1919(大正8)年2月2日
出典:習志野市教育委員会



写真5:スペイン風邪による死者は25名
出典:習志野市教育委員会

約が発効され、兵士たちは収容所から帰還船の待つ神戸や横浜に向かった。ワルデック総督が、部下の解放を見届け、習志野を後にしたのは、20(大正9)年1月であった¹²⁾。

19(大正8)年～20(大正9)年は、太平洋諸島の日本委任統治が決まった年、一方、ドイツでは、ワイメアル憲法が制定された。スペイン風邪が猛威を振るったピーク時と重なる。まさに死の崖っぷちに立ち、戦争とパンデミックの二重の恐怖を乗り越えていた。

5.「ドイツ兵に思いっきり、遊んでもらいなさい。」

初代所長は西郷隆盛の嫡子・西郷寅太郎大佐で、明治天皇の恩召でドイツの士官学校で長期間生活した経験がありドイツ兵捕虜を厚遇した。しかし、スペイン風邪で亡くなった。急遽、所長の後を継いだのは、山崎友造であった。第2代所長の山崎友造(筆者の祖父)も、1902(明治35)

*2:習志野を後にした独兵には、山梨県のぶどう園の指導に招かれ、日本産ワインを育て伝えた者もいる。

年より6年間ベルリン工科大学に留学しドイツ文化に敬意をもっていた。

これら収容所の写真集を見た父(1911(明治44)年生、友造の三男)は、94歳の時、ドイツ兵と遊んだ経験を語りだした。

「7歳の時、僕は、習志野のドイツ兵の収容所の近くに住んだ。京都から転校してまもなくドイツ兵と遊んでいるとおやじが見ていた。後で部屋に来なさいと言ったので、てっきり叱られると思った。ところが、こんな貴重な経験はまたとない。ドイツ兵に思いっきり遊んでもらいなさい!ドイツ語やドイツ体操を学ぶ絶好の機会だ。仲良くしなさいと言って励ましてくれた。もう最高に嬉しくて忘れられない。おやじは、優しい人で捕虜を大事にした。平和主義者だった。」

人は老年期を迎えると、幼少期の写真を見て、風化された記憶を呼び起こすことがある。瞼に焼き付いた感動の経験と情景を語りだす。自らの人生を回想し、遊びの体験から得た自尊感情や自己肯定感は、共創の喜びであり、それらを、子々



写真6:別れの握手をかわすワルデック総督と所長山崎友造少将¹³⁾
出典:1920年(大正9年)1月26日読売新聞

孫々、後世に伝えることに安堵し、幸福(Well-being)を味わっていた。オーラル・ヒストリーは共創の本質を生の声で伝えてくれる。

ベルサイユ条約が発効され、国際連盟が発足した1920(大正10)年に、習志野俘虜収容所は閉鎖された。

6. 水半球・オセアニア世界への旅と伝承

外務省外交資料館の史料によると「習志野俘虜収容所ニ収容中ナル南洋人俘虜ニ閏スル件照会」(19(大正8)年10月25日)という文書が残っている。

「南洋ポナペ島土人ニシテ、嘗テ独逸官憲ヨリ青島ニ派遣セラレ造船業務ニ従事ノ中、日独戦争ニ会シ砲艦『ヤグワール』ニ乗組、次デ我軍ノ俘虜トナリ、目下習志野収容所ニ収容中ナル左記三名ノ者ハ、此ノ際至急解放シ」とある。

*3:山崎友造は、1919(大正8)年1月15日から20(大正9)年4月1日まで習志野俘虜収容所長。19(大正8)年少将に昇格、残務整理を終え翌20(大正9)年7月に軍歴に終止符を打った。52歳、26(大正15)年9月の葬儀、小田原の自邸には弔問の勅使が遣わされた。

祖父が、ポーンペイ島(旧称ポナペ)人捕虜を先に帰還させる手続きをした記録が残されていた。ドイツ領であった南洋群島出身者の名前は、「ウイルヘルム(=ウイリアム)・ヘルゲン(バーガー)」「ヨセフ・ゲオルグ」「ヨセフ・サムエル」。ドイツ風の名前だが、ポナペ島住民で視力に優れ、船の見張り役として青島に送られドイツ兵として戦争に巻き込まれた。どんな心境で習志野の日々を送ったのだろう。のどかな太平洋島嶼から戦乱の渦に巻き込まれ、大勢のドイツ兵士とともに過ごしたポナペ人は、帰国後、後世に何を語り継いたのか。筆者は、ポナペ人捕虜の子孫から、直接、当時の話を聴きたかった。

2005(平成17)年8月20日、俘虜収容所で暮らしたウイルヘルム・ヘルゲンの子孫を訪ねるため、グアム経由でポーンペイ島に降り立った。

息子のフレドリック・ヘルゲンバーガーは、孫と一緒に松葉杖をついてホテルのロビーで待っていた。83歳には思えないほど頑強な身体だが、難聴で耳に手を当てた。挨拶は何と日本語だった。

「よくここまで来てくださいました。」
滞在中、フレドリック・ヘルゲンバーガー氏と家族の語りを毎日、筆記した。

「父から、日本の生活は、実に居心地がよかったですと聞いています。最初のころは熱い食事が多く、ドイツ人もポナペ人も馴染みがなかった。ドイツ料理は、冷めたものが多いと伝えると、収容所では、次第に冷めた料理に切り替えてくれた。料理の得意なドイツ人は、厨房でドイツ料理を作ることがでてきたのです。」「日本での移動は快適な汽車に乗

り、東京駅では、旗を振る子どもたちの歓迎を受けた。収容所の生活はとても居心地がよかった。」

「日本語を学び、歌を歌い、音楽や体操やゲームにも加わることもできた。」

「正直言うと、帰国を勧められた時、帰国したい気持ちとともに日本に滞在したいという気持ちの両方があって複雑だったようです。」

別れの日、ロビーにいたボナペ人が、みんなで「君が代」を歌ってくれた。

オセアニア世界は、数万年前から千年前ほどにかけて人々が移り住んだ。星と風を読み、万里の波濤をこえるカヌーの航海史は、太平洋が島嶼の人々を分かつものではなく、一つに勇気づける偉大な海であったことを伝えてくれる。

水半球には多様な民族が住み、2,000語に近い言語が存在しているという。水爆実験に抗議してきた。同化主義が常識であった植民地支配の歴史に対して、島々は断固、抗議し、「自由」への渴望を歌・踊りや伝統文化に表現してきた。ミクロネシア連邦は、独立時に憲法の前文に、自由と自立にむけた決意を全世界に向けて表明したのである。

筆者は、島に生きる島嶼民の転地の足跡を辿る感動の日々を過ごした。



写真7:涙を流して別れを惜しむフレドリック・ヘルゲンバーガー氏と握手する筆者。

(2005年8月20日16:46 於:ホテルビレッジ。撮影:川嶋正和氏)

7. いかにして社会の分断を防ぐことができるのか

かつて戦争に巻き込まれた人々は、それぞれの日本での体験を子孫に伝承した。日本文化や共創体験を語り継ぎ、「気づき愛」の連鎖が起きた。100年前の写真は、協働とケアの織り成す「安心の居場所」が相互に信頼感を培ったことを物語っている。

いまや新型コロナの世界の感染者数は、1.06億人を超え、死者の総計は232万人を超えた(2021(令和3)年2月10日時点)。最も被害の大きいアメリカではすでに46.3万人が死亡している。第二次世界大戦の死者数よりも多くが犠牲になった。白人に比べ、ヒスピニック系の人は感染率が3倍以上、黒人は2倍以上高かったという。どのような社会的要因が覆い被さっているのだろう。

日本に在留する196カ国289万人の外国人は、コロナ禍で不安と苦しい日々を送っている。特に日本で就労している約166万人の外国人にとってコロナの感染を恐れながらの就労に違いない。そして様々な出会いと協働体験は、歳月を隔て、子孫や周囲に語り継がれるに違いない。

世界の誰もが、外国人の権利や義務、国家と何かを再考する契機であろう。

当時の日本軍は、「ハーグ陸戦規則」1899(明治32)年などの国際条約を遵守し近代国家としての国際的地位の向上を目指し、戦時国際法を遵守し、人道的に敵国の俘虜を扱い手紙のやり取りや地域社会との交流も盛んに行われた。日独交流はいまも続いている。単なる美談として受け止めるのではなく、いかにして社会の分断を防ぐかというヒントや知恵を学びたい。分断の溝が深まれば、暴力を招き、民主主義を危うくするという側面もある。

8. 活路を拓く

多文化共創の道を拓く秘訣は、自由闊達に語る内発的空间を創り、憲法や国際法・国内法を学び人権の概念の理解を共有することにあるだろう。

多文化とは「差異の承認」であり、多文化共創は、同化政策ではない。日本人の多様性にも光を当て、障がい者、一人親家庭、LGBTQ、高齢者、留学生、技能実習生、特定技能外国人、難民、無国籍者など多様な人びとと共創・協働し、それが自立する市民として相互ケアと社会貢献ができる社会である。

自治体、中小零細企業、市民、医療・教育機関の共創・協働の取組みは、人間の安全保障を基礎として、「気づき愛」の連鎖となり未来への投資になるに違いない。本連載は、パンデミックの最中、技能実習生、留学生など若い世代と難民の人々が、自由に語る安心の居場所を創り、学びの場を主体的に共創している事実を伝えてきた。

多様なルーツを持つ人々が民主主義を実感し、憲法や国際法・国内法の概念と個人の自由と生の保障の大切さを学ぶことができる。パンデミック体験はグローバル資本主義の矛盾を露呈し、経済不況・不景気の不安を生み、課題は山積しているが、地道な多文化共創経営が日本の産業を支え、活路を見いだしていることにも着目できた。

日本の政治的リーダーが、共創社会へのビジョンを国内外に自信をもって発信することは、課題に取り組む原動力になる。100年前の歴史から、課題に取り組む内発性と多文化共創への勇気を学ぶことができた。コロナ禍で医療施設、中小零細企業、福祉施設、学校や地域コミュニティが、いかにして危機を乗り越えたかを記録し、写真を撮ることが貴重な史料となる。

たとえ母国の民主主義・民主化が危機的状況に襲われても、人権にねざす「安全の居場所」と多文化共創の信頼関係の重要性を体験と実感をもって伝えることができる。留学生・技能実習生・特定技能・難民が社会貢献に活躍する内発性に光を当てた。

本連載中、調査にご協力いただいた方々に心から感謝したい。2030年を目指す「持続可能な開発目標」SDGs(Sustainable Development Goals)の目的達成にも、人類の移動に伴う共創の歴史を紐解くことによって、人間の叡智を学びとることができる。地球温暖化問題など共通課題に取り組む主体的な実践こそが分断を防ぐことにもなるだろう。

■参考文献

- (1) 習志野市教育委員会編『ドイツ兵士の見たニッポン—習志野俘虜収容所1915～1920』2001年丸善ブックス
- (2) 川村千鶴子「習志野俘虜収容所とポーンペイ(旧ボナペ)人捕虜の帰還—オーラル・ヒストリーの可能性—」『島嶼研究』6号・日本島嶼学会発行2006年9月
- (3) 習志野市教育委員会編『ドイツ兵たちの習志野』2019年12月25日
- (4) 千葉県日独協会翻訳『エーリッヒ・カウルの日記』2020年9月
- (5) 『特別史料展「ドイツ兵士の見たNARASHINO 1915～1920 習志野俘虜収容所」展示品図録』監修:習志野市史編さん委員 上山和雄(國學院大學教授)編集・発行:習志野市教育委員会 生涯学習部社会教育課発行:2005年12月25日

謝 辞

ご教示いただいた元習志野市教育委員会の星昌幸氏、現在の社会教育課の松浦史浩氏、ボン大学Christian Bormann氏、NPO法人太平洋協力機構理事長川嶋正和氏に厚く御礼申し上げたい。

Profile

川村千鶴子 博士(学術)、多文化社会研究会理事長、大東文化大学名誉教授、特定非営利活動法人太平洋協力機構顧問、東アジア経営学会国際連合産業部会